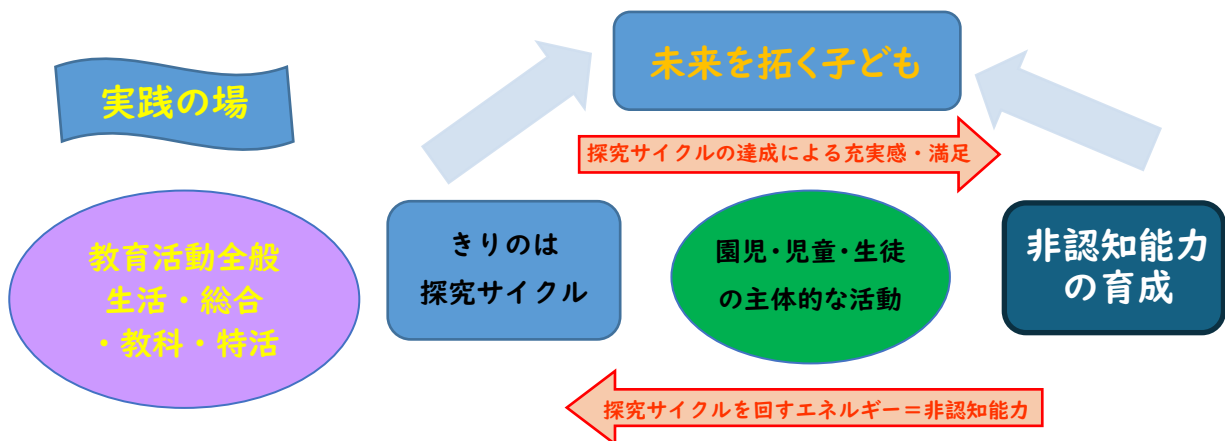


山梨大学附属四校園・教育学部共同研究

I 共同研究主題

「きりのは」で育む 未来を拓く子ども
～附属四校園・教育学部の連携による「非認知能力」の育成～



II 研究計画

- 1 年次 「非認知能力」を育む取組の導入・試行
- 2 年次 「非認知能力」を育むカリキュラムの整備
- 3 年次 「非認知能力」の育ちの見取りと効果の検証

III 各校園の研究主題(令和 6 年度)

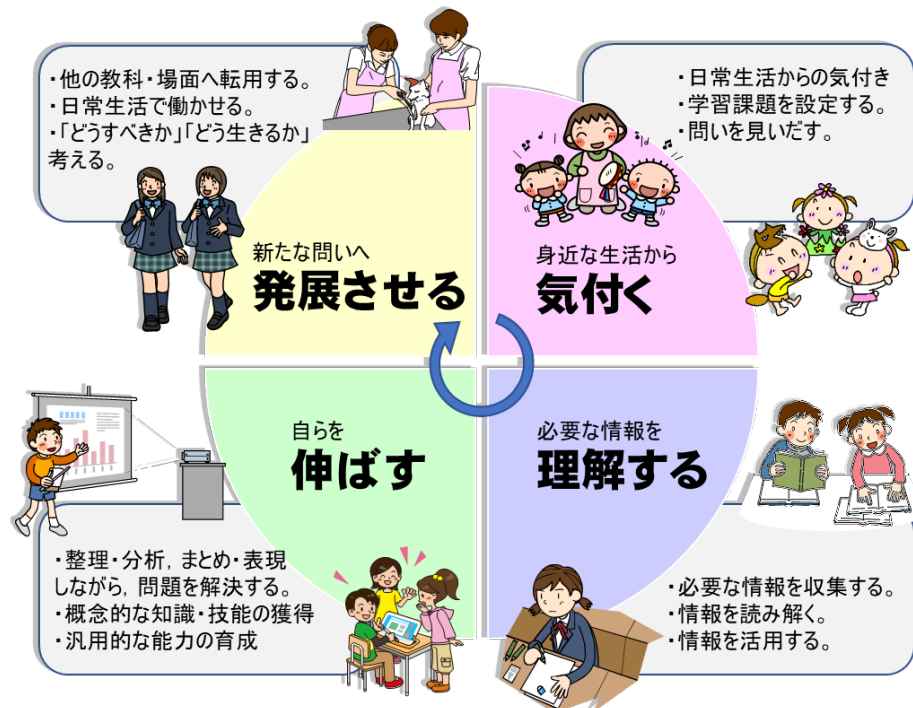
- 幼稚園 研究主題 しなやかに伸びていく子どもを育む保育
- 小学校 研究主題 とともに学び、学び抜く子ども
～非認知能力に注目した授業を通して～
- 中学校 研究主題 新たな価値を創造する生徒の育成
～「主体的な学び」のプロセスモデルを生かした実践を通して～
- 支援学校 研究主題
学びに向かう力×情報活用能力に着目した授業づくり

目 次

非認知能力について	・ ・ ・ ・ ・	2
四校園の探求サイクルについて	・ ・ ・ ・ ・	4
四校園の事例について	・ ・ ・ ・ ・	16
研究のまとめ	・ ・ ・ ・ ・	20
共同研究WGメンバー	・ ・ ・ ・ ・	22

「き・り・の・は」探究サイクル

「**気**付く」→「**理**解する」→「**伸**ばす」→「**発**展させる」



非認知能力について

附属幼稚園 若本純子

本共同研究は、全附属校園と大学が一体となって研究を推進し、先駆的・包括的な知見を地域に提供し、教育の質向上に貢献することを目的に開始された。非認知能力は、資質能力「学びに向かう人間性等」の構成要素であるため共通テーマとされ、各校園の研究関心に応じたサブテーマに基づき研究が進められた。附属幼稚園は、非認知能力を「自己と社会性に関わる心の性質」として研究を行った。詳細は、本園研究主任による執筆部分にてご確認いただきたい。

本共同研究の趣旨

附属学校園を
取り巻く厳しい環境

- 平成28年度の有識者会議以降、附属校園の存在意義やあり方(大学との連携、公共性や地域貢献等)が問われ続けてきた
- コロナ禍が一定収束した後、棚上げされていたこの課題が再度厳しく問われる可能性

大学第4期中期計画
との関連から

- 附属4校園に要求されていること：①先駆的实践研究、②研究と連動した事例の提供、③地域貢献としての現職教員への研修機会の提供（②が基盤になっているとさらに望ましい）

令和4～6年度
附属4校園共同研究

- 本研究では「非認知」という共通のキー概念が設定され、附属校園の一体的な研究の推進と、先駆的かつ総合的な知見の提供が期待され、社会的訴求に応えうる

附属4校園共同研究
における課題

- 「非認知」という概念が教育界で急速に普及した一方、概念規定や測定など研究上の課題を有していること
- 各校園の対象・教育実践の特徴が異なることにより、「非認知」の取り入れ方を統一することは難しく、総合的な知見の提供のためには共同研究全体を俯瞰しまとめるポジションが必要
- 従来より実施されてきた教科型の研究に「非認知」をどう導入するか、あるいは整合・統合させるかに対するサポートが必要

課題解決に
大学教員が貢献

附属小学校 杉山雅俊

ここ十数年の間に、非認知能力という言葉がタイトルに持つ論文や書籍、実践報告が数多く見られるようになってきました。この冊子を手にとられる先生の中にも、グリットや自己調整、批判的思考、レジリエンスなどの概念に注目して実践研究を重ねられている方も少なくないと思います。非認知能力への注目は、これまでと同じように学習内容に関わる認知能力を大切にしつつも、子どもたちの将来の健康や幸福を大切にする教育や、社会参画を通じたより良い社会の実現に向けた教育の意義と価値の強調に支えられているものです。一方、非認知能力は、「認知ではない」という意味を持つこともあり、どのように教育していけば良いのかお困りの先生も多いのではないかと思います。教育現場での実践に際しては、非認知能力を伸ばせるような教育環境を整えること、非認知能力と認知能力とを切り分けて捉えないことが大切です。

附属小学校の「きりの探究サイクル」の事例からは、学習内容に関わる児童の願いや思いを大切にしていること、児童たちが認知能力も高めながらその願いや思いの実現を目指していることを読み取ることができます。また、考え抜くことや自分たちなりの問題解決をキーワードとした後半の事例の背景には、報告者である先生が緻密な授業計画を立てた姿や、児童の学習に粘り強く向き合い続けた先生の姿があります。非認知能力を探究する先生自身も、それぞれの授業力量と非認知能力とを相互的に高めながら取り組まれていることが感じ取れる事例です。

非認知能力について

附属中学校 田中健史朗

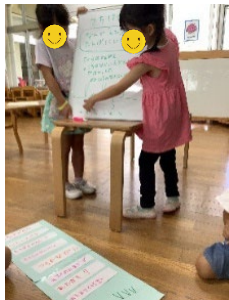
附属中学校では「主体的な学び」のプロセスモデルを構築し、授業実践に生かしてきました。この研究を支えた非認知能力が「Grit」です。Gritは、困難、失敗、競合目標にもかかわらず、長期目標に対して示す「情熱」と「粘り強さ」と定義されています（Eskreis-Winkler, Gross et al., 2006）。非認知能力（non-cognitive skills）は、スキルであり、指導・介入ができる概念であるわけですが、非認知能力が新しく何か特殊なものであるという感覚を多くの先生方が持ち、この点をご理解いただくのに苦労しました。そのため、「情熱」を「動機づけ支援」、「粘り強さ」を「自己調整学習」と置き換えました。その結果、生み出されたものが附属中学校独自の主体的な学びのプロセスモデルです。各教科・単元のなかで、動機づけられている生徒の姿、自己調整を行っている生徒の姿を具体的に描写し、それを評価規準のBとし、それができてないCの生徒に対して、どのような指導を行うと、動機づけや自己調整学習が促進されるのか考え、その工夫を踏まえた授業実践を行ってきました。統計的な分析の結果、生徒が学習の見通しをもったり、自分をモニタリングしたりという自己調整学習ができるようになってきているという成果がみられました。また、動機づけについては内発的な動機づけが高まるという成果がみられました。これらは「主体的な学びのプロセスモデル」を意識した授業改善の成果であり、非認知能力に焦点を当てた研究の意義が示されたと思います。

附属特別支援学校 吉井勘人

特別支援学校（主に、知的障害児教育）では、非認知能力という用語は用いられないものの、その教育の歴史において、障害のある子どもの自立と社会参加を目指して、社会性を育むための様々な体験的学習活動が行われてきました。また、現行の特別支援学校小学部・中学部学習指導要領では、3つの柱の一つとして、「学びに向かう力等」を養うことが目指されています。加えて、特別支援教育の独自領域である自立活動では、「心理的な安定」や「人間関係の形成」といった非認知能力（スキル）に該当する内容を直接的な指導目標として設定することが可能です。このように特別支援学校では、非認知能力を育むための取り組みが経験的に行われ、重要な教育目標として位置づけられています。しかしながら、障害のある子どもの非認知能力（主体性や社会性等）をどのような観点で評価し、その変化を見取ればよいのかが大きな課題といえます。

附属特別支援学校では、「学びに向かう力」を「目標を意識して取り組む力」として5つのエンゲージメント（要素）に基づいて整理し、それらを授業の中で支援し、ルーブリック評価を用いて形成的評価を実施しています。このような知的障害のある子どもの非認知能力を支援し、その変化を見取る試みを行っている点は、非常に価値があると考えられます。

R6 きりのは探究サイクル活動例（附属幼稚園）

	『4歳児』 「紙飛行機のコース、作ろうよ!」	『5歳児』 「何か動いている!」
気付く	年長児が紙飛行機を作っているのを見て、同じように作ってみたいと思ったA児。いろいろな折り方を試しながら、紙飛行機ができあがった。すると、「紙飛行機のコース、作ろうよ!」と、より面白くなる方法を思いつき、「これは、どう?」と、遊びで使っていた“リング”が使えたと気づき、保育者と一緒にテラスに吊り下げ、コース作りをしていった。 	5月、田植えが終わった田んぼを観察していると「何か動いている!」と生き物を見つけた。不思議に思った子どもたちは、その生き物の動きをクラスで共有したり、捕まえてなんとという生き物かを考えたりしていた。 
理解する	リングに紙飛行機を飛ばすことを楽しみ、何度も入るようになってきた。すると、A児は、「今度は、点数付けようよ!」と、リングに点数を付けることを考えた。「ここは、高いところだから、100点!」「こっちは簡単だから、20点!」など、子どもたち同士で相談しながら、“リング”の位置やコースの点数を決めていった。 	自分たちなりに家族に聞いたり、保育者と一緒に調べたりしてこの生き物は「ホウネンエビ」という生き物だと知ることができた。しかし、「どこからきたのか?」と疑問をもった子どもたちは、クラスの中で話し合いを進めていきながら、もっと知りたいという思いを膨らませていった。 
伸ばす	継続して楽しむ中で、「もっと大きい紙飛行機がいい!」と考えたA児。保育者がより大きな画用紙やコピー用紙など、大きさや重さの異なる紙を用意した。「これは、遠くに飛んだ!いちばんかっこいいやつ!」「これはダメ、すぐに落ちちゃう。」と、何度も作り直して楽しんでいくことで、よく飛び紙飛行機を作りたいという思いが出てきた。 	クラスでの話し合いの中で、専門家に聞いてみようということになり、自分たちの予想した考えを元に、田植えを一緒に行った土博士（大学教員）宛に手紙を書き、伝えることにした。自分たちの考えを言葉で表しながら人へ伝えようとする姿を捉えることができた。 
発展させる	「高いところの方が飛ばかも」と、台を使って飛ばしたり、助走をつけたりしながら、様々な飛ばし方を考えていった。また、それを見て、「私もやりたい!」「作り方教えて!」と、他の子どもたちも参加し、一緒に遊ぶようになっていった。 その後も、長い期間にわたって、様々な方法を試しながら、遊びが広がっていった。 	「ホウネンエビ」をクラスの仲間として、飼育するためには何が必要か考えていった。大きな水槽を用意し、自分たちから生き物が見やすいように黒い画用紙を貼ったりして環境を整えたり、水槽の温度が高すぎると死んでしまうことに気がつくめたい水を入れたり、餌は何か必要なのか考えたりしていった。生き物のために自分たちだったらどんなことができるのかを考えながら関わる姿が見られた。 

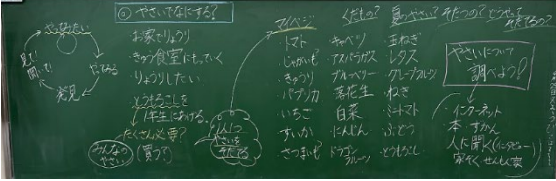
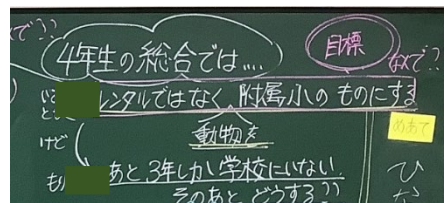
R 5 きりのは探究サイクル活動例（附属幼稚園）

	『4歳児』 「ひまわりの種がいいんじゃない？」	『5歳児』 「やきいも大計画」
気付き	4月末、『ぶたのたね』（作：佐々木マキ 絵本館）の絵本を読んだ後、クラスで「僕たちも種を蒔こう」と意見が出た。「何を蒔こうか？」と相談すると、進級後、不安感が強く、友達とのかかわりが少なかったA児が「ひまわりの種が良いんじゃない？」と言ったことから、クラス名でもあるひまわり栽培を行うことにした。翌日、保育室前で育苗箱に種まきをし、毎日本水をあげていると数日で、芽が出た。「小さいの出てきた！」と大喜びの子どもたち。A児も芽が出てきたことに関心を寄せていく様子が捉えられた。 	昨年度のやきいも会でのこと。当時の年長組が作ってくれたやきいもを1つずつもらって食べた子どもたちは、よほどおいしかったのか、A児「一生分のおいもを食べたかった！」B児「さくらさんになったら、一人2個食べられるようにしたい！」と興奮気味に繰り返した。子どもたちのなかに「年長になったら、やきいも会で一人2個食べられるようにする」という目標ができた。 
理解する	芽が10cmほどになった頃、「ここだと狭いんじゃない」と育苗箱から出した方が良いのではないかとということになり、子どもたちと、畑を耕し、植え替えを行った。A児「お水あげた方が良いよね」「私もあげに行くと、一緒に水をあげに行き、お世話をしていく様子が見られた。 	年長に進級して間もなくの話し合いで、教師の「おいもをたくさん作るには、何が必要なの？」という問いかけに、「肥料には、カルシウムが入ってるって聞いたよ！」「お父さんに聞いたら、“愛情”も必要だって言ってた！」など、教師の予想以上に自分で情報を集めていた。まずは、たくさんのおいもを収穫するために広い畑が必要だと、みんなで畑の場所を決めた。 
伸ばす	ぐんぐん伸びていく苗の様子を見て、「長さを測りたい」と子どもたち。そこで、数人でメジャーを使って、実際の長さを調べたり、「50になった、まだ僕の方が大きい」などと、自身の身長と比べたりしていた。定期的に測った長さをすずらんテープで再現し、壁に掲示することで、A児も友達と「こんなに伸びてきたんだね」「最初は赤ちゃんだった」などと、生長を実感している様子が捉えられた。 	どんな肥料で、どのように栽培するかに関心があるが、どうしたら良いかわからなかった子どもたち。そこで、専門家である大学の先生(通称、土博士)に来てもらえるよう、子どもたち自身が手紙を書くなど、一人一人が考え、自分ができていることをしながらクラスの目標に向かっていった結果、「土博士」の来園が叶った。「土博士」から、サツマイモに必要な土の栄養や植え方を教えてもらい、一緒に土づくりをし、苗を植えた。 
発展させる	夏休み中に開花し、休み明けには、ひまわりの様子をすぐに見に行き、「咲いてる！」「めちゃくちゃ大きいね！」などと、大きくなって咲いているひまわりを見て大喜びの子どもたち。9月後半になると種が採れる状態になり、種に関心をもちた友達数人が集まった。「種がたくさんあるね！」などと言いながらA児を含め、同じ関心をもちた友達と種集めを楽しむ様子が見られた。 	当日は、51個芋を収穫することができた。その中で、A児「さくらさんみんなでたくさん穫れたんだよ、僕は掘れなかったけどね」という言葉があった。この言葉から“やきいも大計画”が、“クラスみんな”の大切な活動になっていたこと、そのために一人一人が自分らしさを発揮して貢献できた誇らしさ、目標を叶えることができたという達成感や満足感が感じられた。 

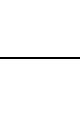
R 4 きりのは探究サイクル活動例（附属幼稚園）

	『3歳児』 「花の中の色が白いからじゃない？」	『5歳児』 「ここに作ればいい！」
気付く	7月。ゴーヤが実っていることを見つけたA児。しばらくゴーヤを見ながら「白いゴーヤ」もあることに気付いた。入園して3ヶ月が経ち、安心して過ごす中で、自分の興味や関心があることに気づいて、じっくりと見たり、試したりする姿がみられ、気付いたことを教師に伝えるようになった。 	5月。園内の池の水がないことを知り、池の葉っぱを取り除いて、池の中を調べた。池の水がなくなったことを不思議に思い、「シートに穴が開いているかも」「海や川につながっているかも」「カラスが水を飲んだかも」など自分なりに考える姿があった。それぞれが、自ら興味をもったことに主体的に関わり、友達の意見も聞きながら自分なりの疑問をもつようになった。 
理解する	ゴーヤを見ながら、A児は色について「白いのは、皮がむけちゃったからだ」、B児はゴーヤに触れた感触から「とげとげしているのに痛くない」とそれぞれの考えを伝えてきた。教師は、子どもの気付きから実際に保育室で白いゴーヤの皮をむいたり、触ったり、花を見たりした。子どもが自ら興味をもったことに、主体的に関わり、自分なりに意味づけ、理解していく姿が捉えられた。 	「ここに作ればいい」と、年長保育室前に新しい池を作ることをD児が提案。「水が入って掘りやすくなった」「こっちは、浅いよ」などと、友達と土の状態を確かめ合いながら、掘り進めていく。掘りにくい、水が流れない事に対して、これまでの経験で得た土や水への知識を基に試すことで、体験を通して対象を理解している姿や友達と協力し合いながら活動を進めていく姿が捉えられた。 
伸ばす	教師の「何で白いゴーヤができるのかな」という質問にC児は、「花の中の色が白いからじゃない？」と答える。C児は「白いゴーヤの花のがくは白で、緑のゴーヤの花のがくは緑」ということを発見した。自分なりに関心をもって、対象と深く関わることで、ゴーヤの花の色と実の色の関係性を自分なりに見出している。関心が深まり広がった。 	水を入れ池のようになってきたが、土が水を吸ってしまい、「ビニールシートが必要」だと気付く。ビニールシートの大きさを測るために、「自分をものさしにする」と言い、実際に寝て測る。さらに、シートを購入するためには、数字で伝えることが必要だと気付く、メジャーで測ることを知った。友達の意見を聞きながら、自分なりに試す姿が捉えられた。 
発展させる	個々の関心に応じて、実際に触ったり、中身を見たり、香りをかいだり、花やゴーヤの色を見たりしたことで、ゴーヤ以外の植物への関心も広がった。自分が興味をもったことに対して、自分なりの思いをもって関わり、想像したり考えたりしたことが次への気付きや発見につながった。 	シートを敷き、池を完成させ、生き物を新しい池に移動させた。自分たちが作った池にトンボが飛んできたことをE児が見つけた。「まだ卵を産んでないけど、広さを見に来た」と、トンボが卵を産んでくれるような池にしようと、図鑑でトンボについて調べ、友達と共有した。 

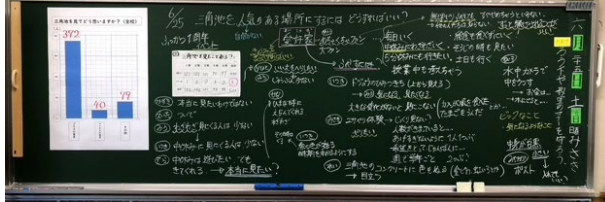
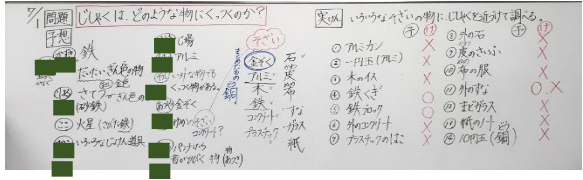
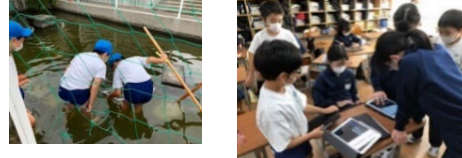
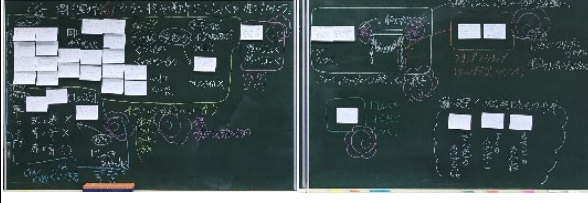
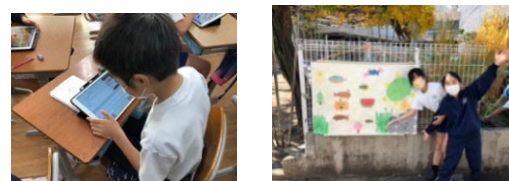
R6 きりのは探究サイクル活動例（附属小学校）

	『生活科』 「飛び出せ!やさいランド」	『4学年 総合的な学習の時間』 「続・どうぶつハウス ～持続可能な飼育に向けて～」
気付く	子どもたちは、1年生で花を育てた経験から今年は野菜を育てたいという思いや願いを持った。栽培が始まってからは、育てている野菜を「もっと大きくしたい」「たくさん実を取るようにしたい」「元気に育て欲しい」という願いをもって野菜に関わっていた。 	昨年度末のアンケート結果の分析から「ヤギの飼育の大変さが全校に伝わっていない」ことに気付き、そのためには「短期間でなく長期間の飼育が必要」という思いをもちはじめた。 
理解する	本やインターネット、野菜に詳しい人へのインタビューを通して野菜の育て方について情報収集しながらお世話をしていた。また、お世話を通して、「葉っぱには細かい毛が生えているよ」「トマトの葉っぱからはトマトの匂いがするね」など、体験的な活動を通して、情報収集していた。 	ヤギレンタル業者さんから「104人全員からの本気が伝わる手紙」というレンタルの条件をいただいた。業者さんの思いを受け止め、自分たちの熱意を「飼育を通して実現したいこと」として具体化して手紙にしたためた。  責任をもって飼えますか？ エサ代は？日々の世話は？ 病気になったら？もし死んだら？赤ちゃんができたなら？
伸ばす	体験的な活動を通して得た気づきを黒板を使って全体で共有したり、ワークシートに表現したりした。全体共有では、気づきと気づきを関連付け新たな気づきや新たな思いや願いが生まれていた。また、ワークシートでは五感を使ってじっくりと観察したり、自分の野菜と友達の野菜を比較したりする姿が見られた。 6月14日 	ヤギの飼育を通して「全校のため」「ヤギのため」「自分たちのため」にしたいことを整理し【ヤギの飼育を通して命の大切さ（学校で動物を飼育する意味や価値）】について全校で考えてもらうためのプロジェクトを構想し、グループごとに活動を始めた。  ヤギの募金にご協力お願いします 注意事項 ①募金用のお金は封筒に入れてもってくださる事 ②壁下使用のお金はいれていけない ③募金はきょうせいではありせん！！
発展させる	子どもたちは、活動の中で得た気づきをもとに「もっと〇〇したい」という思いや願いを持つようになった。もっと大きくするために、温度を管理するためにビニールハウスを作ったり、栄養を与えるためにコーヒークずで肥料を作ったりする姿が見られた。 	「自分たちのこれまでの活動で、私たちの思いは伝わったのか」全校のみんなからフィードバックを得るためにアンケートやインタビュー活動を企画した。得られた結果を基に、活動の成果と課題、自分たちの成長を振り返り、今後の探究へと生かしていく。また、飼育してきたヤギとの別れは、子どもたちにとって「まだ続けられる」「これ以上は難しい」といった答えのない議論を生んだ。現代における学校での動物の飼育の課題に直面し、それに向き合った経験が、新たな課題に立ち向かう際の支えとなることを願っている。

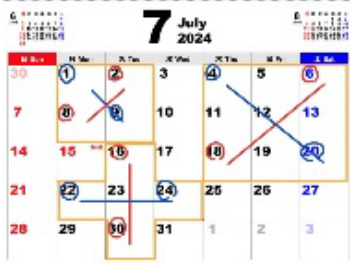
R 5 きりのは探究サイクル活動例（附属小学校）

	『第3学年 理科』 「明かりをつけよう」	『第2学年 生活科』 「おもちゃハピネスランド」
気付く 	導入では、中身の見えない明かりがつくおもちゃとつかないおもちゃを提示。共通点として、中身は同じであることから、自然に明かりがつく仕組みに児童は注目した。「どうすれば明かりはつくのか」と問題設定。	導入では、ロケットのイラストを提示し、「工夫してロケットを動かそう」と課題を提示した。子どもたちは、風やゴムなどの動力に注目し、「動くおもちゃを作りたい」という願いを持った。
理解する 	予想を交流する中で、「導線のつなぐ場所」や「乾電池の向き」や「導線の色」などの変数を見出した。見出した変数に注目し、実験を行い、それぞれの結果を黒板に一覧化した。児童は自然に異同を見出していた。	動力に注目しながら動くおもちゃを作った。おもちゃを作る中で「もっとよく動かしたい」という願いを持ち、どうすれば遠くに飛ぶのか、どうすれば早く飛ぶのか試行錯誤を繰り返す中で、素材の特徴に気付いていった。
伸ばす 	考察では、帰納法的に「導線を乾電池の両側に1本ずつつなげると明かりがつく」と結論を導出。単元を通して理科の見方・考え方「比較する」を価値づけ、「理科の目」という呼称でその学習行為の良さを共有。	「友達のおもちゃで遊びたい」という願いをもち、お互いのおもちゃで遊ぶための工夫をした。どうすれば相手が面白くなるか考え、材料の特徴に注目しながら、ルールや難易度を工夫していた。
発展させる 	他教科の学習においても、複数の考えを検討する際、「ここでも理科の目(比較する)が使えるそう」とつぶやきながら、学習に参加する児童の姿が見られた。	おもちゃを取り扱う中で「おもちゃの作り方を説明したい」「おもちゃの体験教室を開きたい」等、多岐にわたる願いが表れてきた。全てをまとめて、「おもちゃハピネスモール」遊びから発展した活動を行った。

R 4 きりのは探究サイクル活動例（附属小学校）

	『3学年 理科』 「じしゃくにつけよう」	『4学年 総合的な学習の時間』 「未来へとつながって池!!～持続可能な環境づくり～」
気付く	・磁石を用いた教師のマジックを見るなかで、磁石の性質やはたらきに関わる生活経験を想起する。 ・いろいろなものにじしゃくを近づけることで、磁石の性質やはたらきについて、気付きや疑問をもつ。 →自由試行や話し合いのなかで自分がこれまでにもっていた磁石についての素朴概念が揺さぶられ、問いが醸成される。 「同じスプーンなのに、くっつく物とくっつかない物がある」 「銀色の物なのに磁石につかないのはなぜだろう」  ・磁石を近づける材を教師が意図的に選定したことで、育成をめざす質・能力につながる問いが醸成され、解決をめざす問題を見いだそうとする意欲的な姿が見られた。	・これまでの取り組みの成果を確認し合うことを通して新たな問いを見出し、今後の活動への見通しをもつ。  「三角池を知っている人が増えた」と成果を出し合う一方で「これで本当にいいのか」と感じている子どもの意見を意図的に取り上げ共有することで「三角池を人気のある場所にするためにはどうする?」という新たな探究のサイクルがスタートした。 
理解する	・見いだした一つひとつの問題を実験→考察の過程を経て解決することで、磁石の性質やはたらきについての知識・技能を更新する。  ・これまでももっていた磁石についての素朴概念が科学的な概念へと変容することに、喜びや達成感を感じている姿が見られた。	・「三角池プロジェクト」を立ち上げ、三角池を人気にするための取り組みをグループごとに追究する。 「三角池の愛好家を増やす＝中休みに池に来る人を増やす」という共有されたゴールに向かって「この方法なら人気になる」という子どもの関心に基づいてグループを編成し、それぞれに到達目標を決めて活動を展開した。 
伸ばす	・一つの問題解決をゴールととらえず、その過程で生まれた新たな問題の追究を繰り返していくことで、磁石についての科学的な概念の獲得に向けて粘り強く取り組む。 「磁石のなぞが少しずつ解明されていくね」 	 ・それぞれのプロジェクトの効果を分析し、成果が上がった理由を明らかにしたり改善策を講じたりする。 新聞や紹介動画を作る、イベントを企画する等の活動を展開する中で「登下校や中休みに池を覗いていく人が増えた」と成果を実感する姿が見られた。
発展させる	・これまでの学習を振り返る。 ・身近にある磁石の性質やはたらきを利用した物について想起し、学習してきたことと関係づけて考え、説明する。 「磁石どうしを近づけると動いたりくっついったりするのは、S極とN極があるからだだったんだ」 「窓のサッシは銀色だけど、磁石がくっつかないから鉄ではないね」	・三角池プロジェクトのゴールに立ち返り、現状を整理し、今後について話し合うことを通して新たな問いを見出す。 「このままプロジェクトを続けるだけでいいのかな」「今の三角池を5年生になっても保ち続けるためにはどうすればいいかな」といった問いを見出し、新たな探究のサイクルがスタートした。

R6 きりのは探究サイクル活動例（附属中学校）

	『第1学年 数学科』 「文字式の利用」	『第2学年 技術分野』 「生活を便利にする製品を開発しよう」
気付く ↓	○ある月のカレンダーを見て、気づくことを挙げる。 ▷九九表での同じような活動を想起し、さまざまなきまりを見つけようと「興味」を持っていた。 	○計測・制御の技術を使った問題解決において「移動教室の際に、電気を消し忘れる問題をどのように解決するか」という課題を設定した。 ▷センサやアクチュエータを検討し、どのように問題を解決するか「興味」を持ち、考えていた。
↓ 理解する	○多くの生徒が見つけた、「2×2の正方形の形に数を囲むと、和が等しくなること」等について文字を用いて考えた。 ▷文字を用いることできまりの一般性を示そうと「努力」していた。	○考えた解決方法を交流し、センサやアクチュエータ、多数のプログラム処理方法に気付いた。 ▷同じセンサでも値をプログラムによって、完成するものが違うことに感動し、他の組み合わせについて「努力」して考えていた。
↓ 伸ばす	○他者と交流して、よりよい解決方法について議論した。 ▷よりよい方法を目指して考え続けることや、得られた式の意味を考えて理解しようとする「粘り強さ」が見られた。	○「生活の問題を解決するものを製作する」という課題を提示し、その製品を作成した。 ▷どんな問題が解決できるのか、どのようにすれば解決できるのか粘り強く考え、試行錯誤していた。 
↓ 発展させる	○示す事ができたきまりを発展させると、他にどんなことが言えるかを考えて、文字を使って示した。 ▷自分で考えを発展させ、同じように示せるかに「興味」を持っていた。	○試行錯誤した経験を、次の学習に生かした。 ▷技術で問題を解決することへの「興味」を持って、次の問題解決学習について使用する部品等を決め、意欲的に試行錯誤している姿が見られた。

R5きりのは探究サイクル活動例（附属中学校）

	『第1学年 音楽科』 「A 表現：歌唱」	『第2学年 理科』 「化学変化と物質の質量」
気付く	○iPad に録音した自らの歌声と模範とする歌手の歌声を比較聴取し、「どのような声を目指したいのか。」という個人目標を設定した。 ▷模範とする歌声を味わって聴くことで、「興味」をもって授業に臨む姿勢が見られた。	○化学変化における質量の変化について、「銅と酸素が反応するときの質量には、どのような規則性があるか」という課題を設定した。 ▷課題について「興味」をもって考え、根拠を挙げながら自分の仮説を立てる姿が見られた。
理解する	○様々な種類の歌唱曲を比較聴取し、声の音色について違いや共通点に気づいた。 ▷曲にふさわしい声の音色について具体的なイメージをもち、表現につなげようと前向きに「努力」する様子が見られた。	○他者の仮説と自分の仮説を比較し、相違点や共通点に気づいた。 ▷批判的に思考し、仮説やその根拠が科学的により適切なものにしようと「努力」し、表現する姿が見られた。
伸ばす	○教師が提示した練習用動画から自分の課題に合ったものを選び、曲にふさわしい歌声で歌唱できるよう練習を重ねた。 ▷練習前の歌唱音源と比較しながら、よりよく表現し続ける「粘り強さ」が見られた。	○実験を行い、実験結果から規則性を見出せるか、またどのような規則性があると言えるか考えた。 ▷実験データの誤差とその理由について検討し、規則性があると確かに言えるか粘り強く考える様子が見られた。
発展させる	○本題材で学んだことを次の題材や歌唱活動に生かした。 ▷「表現」することへの「興味」をもち、曲にふさわしい歌声を表現しようとする姿が見られた。	○仮説を設定や実験データの誤差を検討する技能を、以降の学習に生かした。 ▷科学的な事象への「興味」をもち、根拠を挙げながら仮説を設定して科学的に探究しようとする姿が見られた。

R4 きりのは探究サイクル活動例(附属中学校)

	『第1学年 社会科』 「地理的分野:アフリカ州」	『第2学年 美術科』 「デザイン:ロゴに願いを込めよう!」
気付く	○アフリカ州の人々の生活や経済の状況が分かる資料を読み取り、単元を貫く問い「アフリカ州は本当に貧しいのだろうか。」を設定した。 ▷問いを設定する過程で、単元の題材に「興味」をもっている様子が見られた。	○身近なロゴのマップを作成したり、2つのロゴを比較し、形や色等の特徴を捉え、「ロゴに込められた思い」等について考えたりした。 ▷生活の中で身近なものを題材に扱うことで「興味」をもって臨む姿が見られた。
理解する	○アフリカ州の自然環境や歴史、文化的特徴、産業などについて資料等を活用して調べた。 ▷毎時間の終わりに単元を貫く問いにどのように近づけたかを確認することで、問いを解決しようとする「努力」を続けていた。	○2つのロゴを比較した中で理解したことをもとに、実際にロゴのアイデアスケッチを考えた。 ▷どのようにして主題を形や色等で表現し伝えるか、試行錯誤しながら「努力」し続ける姿がアイデアスケッチから見られた。
伸ばす	○調べたことをまとめて、単元を貫く問いに対する自分なりの結論を導き出した。また、意見交流を通して、自分なりの結論について検証した。 ▷よりよい結論を目指して考え続ける「粘り強さ」が見られた。	○アイデアスケッチをもとに、思いが他者に伝わるかどうかという視点で自分の案を再考した。 ▷他者から見た視点をもとにして、より主題が伝わるロゴにするために、形や色、文字等を替え、アイデアを再考する「粘り強さ」が見られた。
発展させる	○自分たちの身の回りにあるアフリカ州産の商品やアフリカ州に関するニュースにも「興味」をもち、学習したことを生かして自分なりに調べたり、考えたりした。 ▷学習したことで、さらに「興味」をもち、アフリカ州について学ぼうとする姿が見られた。	○年間指導計画の中で、本題材の中で学んだことを次の題材に生かした。 ▷「表現」への「興味」をもち、さまざまな手法を用いて、思いを表現しようとする姿が見られた。

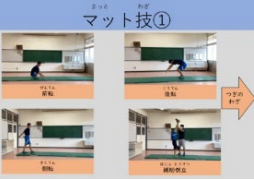
R6 きりのは探究サイクル活動例（附属特別支援学校）

	『小学部低学年 生活単元学習』 「再現遊び『パオちゃんのもんたておかたづけ』」	『中学部 総合的な学習の時間』 「自分らしい表現をグループの仲間とつくりよう」
気付き	①目標設定 - 絵本の読み聞かせ後、再現遊びの前に、場面カードから、好きな場面（再現したい場面）を選ぶ。 <支援> - 読み聞かせでは、お話の流れを意識できるよう、読んでいる場所や登場人物などの指さしをしながら行った。 	① グループ発表を考えよう - なりたい自分の表現計画を考える。 - タブレットで調べたりグループのアドバイスをもらったりする。 - グループで個々の表現やグループ発表の流れを話し合う。 - 道具を準備したり、台詞や動きを練習したりする。 
	児童 A の様子 徐々にお話の内容を理解し、流れに沿って指さしや発声が見られるようになった。また、回を追うごとに明確に好きな場面を指さしにより選ぶことができた。	生徒 A の様子 ワークシートを使って毎時間、具体的な目標設定することで、目的意識をもって、動きを考えたり、自分の意見を出したりすることができた。
理解する	②方略の選択 - お話の展開に応じて、みんなで場面ごとに再現遊びを行う。 <支援> - 再現する場面が分かりやすいよう、使う道具などを適切なタイミングで提示するようにした。 	② グループ発表の練習をしよう - グループ発表の流れを意識して練習をする。 - 動画を見て発表の修正点やグループの協力の様子を話し合う。 - 必要な道具を更に作ったり、台詞や動きを修正したりする。 
	児童 A の様子 初めは、教師の促しが必要だったが、自分から道具を取りに行くなど、自分から積極的に再現しようとする様子が見られるようになった。	生徒 A の様子 練習を積み重ねていく中で、仲間意識が高まり、「協力して表現する」や「みんなをまとめる」などを選ぶことが増えていった。
伸ばす	☆再現遊びの繰り返し <支援> 言葉での促しだけでなく、教師が近くで見本を見せる、友達の様子に注目させるなど、段階的な支援により行動を引き出すようにした。	③全体練習～きりのこまつり発表 - 台詞や動きなどを更に改善する。 - 友達の表現の良いところを見つける。 - グループ発表本番 
	児童 A の様子 初めは、自分の興味のある所へ行ってしまうが、道具をもって違う遊びをしていたりしていたが、徐々に周りの様子を見て動く姿が見られるようになった。	生徒 A の様子 グループの友達の発表や、他のグループの発表を見ることで、友達の良い表現を見つけ出し、肯定的な意見を出すことができるようになった。
発展させる	③振り返り - 楽しかった場面（印象に残った場面）を選ぶ。 <支援> - 取り組み初めは、場面カードを提示していたが、お話への理解が深まってきた様子を見て、絵本を渡して、楽しかった場面をたずねるようにした。 	④きりのこまつりを振り返ろう - 劇発表の鑑賞をする。 - 他のグループの良いところを話し合う。 - 振り返りシートで自分の表現を振り返る。 
	児童 A の様子 初めは場面カードから選んでいたが、次第に絵本の中から選ぶことができるようになり、お話の展開が理解できていることが窺えた。	生徒の様子 自分たちのグループ発表や劇発表に達成感を味わうとともに、他の友達やグループの良いところを見つけて意見を出すこともできた。

R 5 きりのは探究サイクル活動例（附属特別支援学校）

	『中学部 美術科』 「イメージを広げて背景画を作ろう」	『小学部 図画工作科』 「ペットボトルでつくろう」
気付く ↓ 理解する ↓ 伸ばす ↓ 発展させる	・自分たちが作る背景画の場面（季節）について知り、活動グループで話し合い場面に合ったイメージカラーを考える。 【課題の設定】 ・季節の写真や劇のイラスト、セリフから、「桜」や「ちょうちょ」など、生徒それぞれが興味関心をもったものをもとにイメージカラーを提案することができた。	・ペットボトルを使って、乗り物を作ることを知り、図鑑やイラスト、見本の作品、タブレット検索により、自分の作りたい乗り物を決める。 【課題の設定】 ・タブレット端末で検索したり、提示された視覚資料から選んだり、見本の作品を参考にしたりと、自分なりの方法で作りたい乗り物を決めることができた。
	・イメージカラーを絵の具で表現したり、イメージカラーに合ったものをタブレット端末で写真撮影したりし、素材を集める。集めた素材を使ってコラージュにより、背景画を作成する。 【情報の収集・整理分析・まとめ・表現】 ・友達の撮影を手伝ったり、友達が塗る様子を見て真似してみたりと、協働により、よりよく活動しようとする様子が見られた。	・作りたい乗り物に合った材料（ペットボトルや色紙、ペットボトルキャップなど）の必要な数や組み合わせ方などを考えながら、材料を選んだり集めたりする。 【情報の収集・整理分析】 ・スポーツカーや電車などの形をイメージしながら材料を選ぶ様子が見られた。大きな車を作るためのパーツづくりのために、たくさんのペットボトルを用意する児童もいた。
	・完成した背景画を発表し合い、互いに「いいところ」や「もっとよくなるには」を考えてアドバイスをし合う。もらったアドバイスをもとに背景画を作り変える。 【振り返り・改善・まとめ・表現】 ・協力して発表できるよう役割分担をしたり、伝える相手のことを考えてアドバイスの仕方を工夫したりしていた。もらった意見を受け入れて背景画を作り変えることができた。	・集めた材料を使って、自分が作りたい乗り物をイメージしながら、作っていく。作りながら、材料をさらに増やしたり、思い通りに組み合わせられるようペットボトルを選び直したりする。 【整理分析・まとめ・表現】 ・見本の作品を見て組み合わせ方を確認しながらくっつけたり、検索した画像をタブレット端末に表示させて確認しながらタイヤやライトをつけたりと、見比べながら自分なりのイメージをもって表現していくことができた。
	・背景画の画像を使用したカレンダーづくりに取り組んだ。グループで構成を話し合ったり、ホチキス留めなどを行ったりして完成させた。完成したカレンダーは、他学部や地域交流の相手にもプレゼントした。 【表現】 ・キーホルダー、ランプシェード、バッグ、Tシャツ、カレンダーなど様々な意見を出し合うことができた。意見を出し合ったり、画像を再構成したりすることに、意欲的に取り組んだ。	・振り返りでは、①なにを？②がんばったこと、③つぎは？の3つについて教師とやりとりをしながら発表する。発表した内容をシートにまとめ、次時の作品作りに生かす。 【振り返り・改善】 ・シートを見て、作りたいものを改めて確認したり、前時の内容を思い出し、どこまでできたのかを確認し見通しを立てたり、徐々に難しい組み合わせの作品に挑戦したりと、実態に応じて、学習意欲の持続や向上が見られた。

R 4 きりのは探究サイクル活動例（附属特別支援学校）

	『高等部 保健体育科』 「器械運動～連続技に挑戦しよう～」	『小学部 体育科』 「ボール遊び～なげていれよう!」
気付く	・マット運動において様々な技があることを知り、自分で好きな技を選ぶことで、連続技に挑戦することへの意欲を高める。 	・ボール遊びをすることを知り、ボールに自分から触れたり、投げてみようとしたりする。投げてまどに入れる楽しさや達成感を感じる。 
理解する	・iPad を活用して技を見たり選んだりすることで、マット運動への関心や、連続技に挑戦する意欲を高めることができた。  ・教師の見本だけでなく、iPad を活用して難易度別に示された技の動画を見ることで、技の動きやポイントを知る。 ・見本の動画を繰り返し見ながら取り組むことで、体の部位をどう動かせば技ができるのかへの意識を高めることができた。	・的に入れる遊びを繰り返し経験することで、的に入るように投げるためには、上から投げると入りやすいことを知る。 ・投げ方の見本を見たり、上から投げて入った時に称賛を受けたりすることで、上から投げる良さを実感することができた。 
伸ばす	・技に挑戦している姿を生徒同士で撮影し合い、自分や友達の動画を見ることで、自分の動きを確認したり、友達と改善点を出し合ったりする。  ・自分の動きを客観的に捉えたり、気づいたことを友達と出し合ったりすることで、よりよい動きで技ができるようになるためのポイントに気づくことができた。	・繰り返しの的に入れる遊びに取り組む中で、徐々に的までの距離を遠くしたり、高くしたりしていくことで、腕をあげる高さや、腕を振る強さなど児童なりに、投げ方を工夫していく。 ・的が遠くなったり、高くなったりするに従って、構える際に腕の高さを意識し、投げるまでのモーションに慎重さが見られるようになった様子から、確実に入れたりという意欲が見られた。 
発展させる	・授業終了後のアンケートにより、自分の気づきを振り返る。 ・教師による見本や身体的援助などによる指導だけでなく、ICT 活用により主体的に試行錯誤することや、友達と協力し合いお互いに高めあうことの良さに気づくことができた。	・色々な高さや距離の的に挑戦することで、力加減や腕の高さなど、的に応じて工夫して遊ぶ。 ・たくさん入れたいという気持ちをもって、的の高さや距離に応じて、投げ方を見学個々が工夫したり、自分に合った高さの的を選んで挑戦したりすることができた。

事例集

やきいも大作戦 ～粘り強く協力して取り組む

附属幼稚園・年長組

年中組の焼き芋会で食べたサツマイモがあまりにもおいしかったことから、「年長組になったら1人2個食べたい」という目標をもった子どもたち。年長組になっても思いは続き、お芋をたくさんつくるにはどうしたら良いか、クラスのみんなや保護者と相談したり、大学教員(通称“土博士”)にも話を聞いたりしながら、子どもたち自身が「やきいも大計画」を立ち上げ、畑作りや苗植えを行った。

いよいよ芋ほりの日。お芋はたくさん収穫できたが、全員が掘り出せたわけではなかった。その収穫できなかった子どもの1人が、「クラスみんなでたくさん穫れたんだよ、僕は掘れなかったけどね」と言った。その後の焼き芋会では、1人2個食べることができ、子どもたちの目標は達成された。活動を通し、意欲や、粘り強さといった育ちに加え、自分は掘れなくともクラスでの目標達成を喜ぶ姿から、協同性、すなわち社会性の育ちが捉えられた。

留意点

- ・年中組の思いが、進級してからも続いていることを捉え、より関心が深められるような環境を整えた。
- ・身近な大人だけでなく、外部の専門家の話を聞く場を作ること、子どもの関心をさらに深められるようにしてようとしていった。



根っこと背比べ ～不思議との出会いを通して～

附属幼稚園・年少組

5月、砂場に穴を掘っていると、根っこを発見した子どもたち。掘り進めていくと、様々な形や長さの根っこを発見。「長いのがとれた!」「もしましやだ」と大喜び。そこに1本、一際長い根っこがあり、子どもたちは、「長いね!」と言いながら、周辺の土を掘っていった。しかし、掘っても根っこが出てきて、子どもが思いきり引っ張ってもちぎれない程だった。ようやく2mほどの根っこが露わになった時、一人の子が引っ張ると、「プチッ」と音を立てて根っこがちぎれた。「とれた! すごいおおい!」と喜ぶ。子どもたちが長さに関心を寄せていると捉えた保育者は、模造紙を出し、根っこを貼り付けた。その模造紙を壁に貼ると、自分の体の大きさと比べ始め、「どっちがおおい?」「先生ぐらいあるね」「私も大きいんだよ」などと喜んでいった。子どもたちは、一連の遊びの中で、「すごいものが見つかった」という満足感や充実感を感じているようだった。



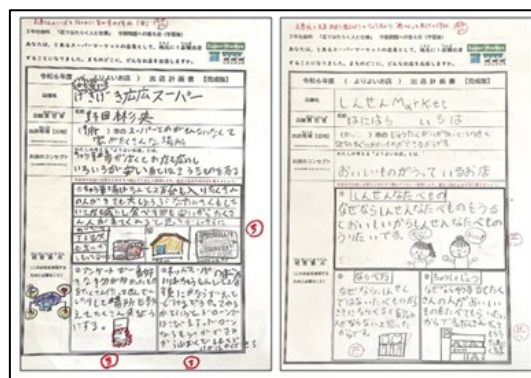
留意点

- ・子ども自身が気付いたり発見したりしながら、「もっとこうしたい」という思いを支えるよう援助していった。
- ・数をまだ正確に理解していない年齢の子どもたちが、長さに関心を寄せている様子を捉え、模造紙に貼り付け、自身の体と比較することで、長さを実感できるように援助した。

本実践は、小学校第3学年社会科「店ではたらく人と仕事」を扱ったものである。「考え抜く」学習過程を複数段階設定し、異なる学び方をあえて順番に並べて全員の子供たちが経験できる学習計画を作成した。学習のまとめとなる「出店計画書」には、子供の「どこを深く学びたい」というニーズの多様性が現れた。ある子供は、「どのお店も」取り入れている工夫を重要視し、別の子供は、様々なお店を比較「そのお店ならではの」個性に注目して、自分の思い描く「よりよいお店」を具体化していた。

様々なお店を比較した情報を共有する学習を充実させたことで、多くの視点や立場からお店の工夫を考えることができた。

(神戸博貴)



留意点

「スーパーマーケットA」をもとにした学習しか行っていない現状を共有したことで、「比較学習」への必要感をもち、その可能性を考える学習に前向きに取り組めていた。授業者主体での授業づくりでも、子供＝学習者の意見を生かし、ともに紡いでいくことで、学習者の必要感に沿った授業を構築できる。その経験の積み重ねが学習者主体の授業づくりにつながっていくと考える。

本実践は、小学校第5学年理科「物のとけ方」を扱ったものである。これまで発言力のある一部の児童の声や教師のファシリテートを通して進めてきた実験計画の立案を、少しずつ少数グループや個々へと委ねることに挑戦した。トライ＆エラーを繰り返しながらも、自分たちなりに考えた解決方法で問題を解決することができた(できそうだ)という期待感や達成感を味わうことで、自分なりの解決方法を考えて問題を解決していくことに価値や必要感を見いだす姿が見られた。

(山崎壮)



留意点

子供たちに計画立案を委ねることにより、それぞれの計画には差異が生まれ、全体で進めるよりも実験におけるエラーも起こりやすくなる。しかし、完全な計画ではなかったとしても、「〇〇は確かめることができたね」「□□ということがわかっただけでも価値があるね」のような、指導者による価値付けを大切にすることで、「自分たちの力で確かめることができた」という達成感や、「次も自分たちで考えた計画で実験したい」という期待感の醸成を目指して実践を続けていくことが大切であると考えている。

【実践の概要】

- ・中学校国語科(3年)の授業
- ・ねらい:生徒が触れる作品の幅を広げることができる。
自分の考えを伝える表現力を高めることができる。
- ・主な活動:テーマをもとに、多様なジャンルの本を関連づけて紹介する。

【ターゲットの実態】

- ・発表内容を考えることが困難である。(学習に着手できない。)
- ・自分の考えを言葉として表現することが難しい。

【ターゲットへの支援】

◎GRITを育む支援の視点:関係性

- ・班員同士で助言をし合える環境をつくるよう意識した。

【ターゲットの変容】

- ・意欲が高まり、粘り強く取り組んでいた。
- ・仲間の紹介の仕方や選んだ本に興味を示していた。

(実践者:山本 祐太郎)

留意点



- ・図書室で行うことで、司書教諭のサポートを受けることができ、有効であった。
- ・教師による手本を示すことも有効であると考える。
- ・発表内容を考える時間を十分に取る必要がある。

【実践の概要】

- ・中学校保健体育科(2年)の授業
- ・ねらい:
基本的な技能(投げる、捕る、打つ)を身につけることができる。
合意形成の為の関わり方を見つけ、仲間に伝えることができる。
- ・主な活動:失点を最小に抑えるための課題を考え、伝える。

【ターゲットの実態】

- ・基本的な技能の習得に課題がある。
- ・話し合いへの参加や学習カードに考えを記入することが難しい。

【ターゲットへの支援】

◎GRITを育む支援の視点:自己調整

- ・動画で自分の動作と上手な生徒の動作を比べさせた。
- ・話し合いを通して、自分に足りない技能や考えを見出させた。

【ターゲットの変容】

- ・基本的な技能が向上した。
- ・図やイラストなどを用いて自分の考えを表現していた。

(実践者:深澤 一晃)

留意点



- ・ゲームを行う際に、技能のレベルの差が大きく、ルールを工夫する必要がある。
- ・話し合いの時間と活動量のバランスをとる。

自己調整学習のサイクルに沿った活動の繰り返しにより
自ら再現遊びに向かう行動を引き出す支援

再現遊び「パオちゃん みんなでおかたづけ」全15時間

① 目標設定

- ・絵本の読み聞かせ後、再現遊びの前に、場面カードから、好きな場面(再現したい場面)を選ぶ。
- ・児童Aの様子回を追うごとに明確に好きな場面を指さしにより選ぶことができた。

② 方略の選択

- ・お話の展開に応じて、みんなで場面ごとに再現遊びを行う。児童Aの様子初めは、教師の促しが必要だったが、自分から道具を取りに行くなど、自分から積極的に再現しようとする様子が見られるようになった。

③ 振り返り

- ・楽しかった場面(印象に残った場面)を選ぶ。
児童Aの様子初めは場面カードから選んでいたが、次第に絵本の中から選ぶことができるようになり、お話の展開が理解できていることが窺えた。



留意点

- ・読み聞かせでは、お話の流れを意識できるよう、読んでいる場所や登場人物などを指さしながら行った。
- ・再現する場面が分かりやすいよう、使う道具などを適切なタイミングで提示するようにした。
- ・再現する際、言葉での促しだけでなく、教師が近くで見本を見せる、友達の様子に注目させるなど、段階的な支援により行動を引き出すようにした。

グループ活動で自己効力感を育てる実践

仲間との関わりを通して、お互いに自分らしい表現を
見つけ出し、自信をもって発表する姿を引き出す支援

総合的な学習の時間「ステキな自分ショー」

(全10時間から変容の見られた3時間を抜粋)

- ①動きを決めることをめあてにして、動きが完成した後、次はセリフや曲を決めることを課題とした。落ち着いて話し合うようになり、アドバイスする際に、仲間のシートに書かれていることを確認して伝えた。
- ②グループ発表成功に向けて、作戦として、「みんなをまとめる」を選んだ。仲間のアドバイスを受け、セリフを大きい声で言うこと、スケボーのスピードを上げることを課題とした。自分からグループ以外の人にも意見を聞くようになった。
- ③ 仲間のセリフの量が少ないと言っていたが、練習の中で大丈夫と判断した。別の仲間のキーボード演奏に、キーボードを広く使うようアドバイスした。他者評価が増え、自己評価についても肯定的になってきた。

発表当日:体育館を広く使って生き生きとスケボーを滑り、難しい技にも挑戦するなど自信をもって発表していた。



留意点

- ・具体的な内容での選択肢が書かれたワークシートを使用することで、生徒自らが目標設定や作戦を考えることができるようになった。



研究のまとめ

附属幼稚園

本園では、「非認知能力」を、遠藤利彦(2022など)の「自己と社会性に関わる心の性質」とする見方に則り、「非認知」と表現してきた。「しなやかに伸びていく子どもを育む保育」を研究主題とし、「非認知」の様々な面が相互に関連し合いながら「一人一人がその子らしく多様な過程をたどっていくこと」を、「しなやかに伸びていくこと」と定義し、それを実現する保育とはどのようなものか検討を進めてきた。1年次は、子ども一人一人が異なる過程をたどりながら育っていく「しなやかな伸び」がどのようなものか、比較的長期にわたる子どもの姿からみとることを行った。2年次は「しなやかに伸びていく子どもを育む保育」とはどのようなものか、具体的な実践事例から検証を行った。3年次には、1, 2年次の研究成果をふまえ、子どもの「非認知」が一人一人その子らしく伸びていく保育に焦点を置き、現行の教育課程や指導計画の改訂を目指してきた。本研究以前は、感覚的に子どもが「育ってきた」と感じていたことが、今回、「非認知」に焦点を置いた研究を進めていく中で、園生活において、子どもの何がどう育ち、多くの子どもたちの伸びが具体的に「非認知」のどの側面なのかを捉えられたことが、大きな成果として挙げられる。さらに、継続的に取り組んできた定量的な分析により、育ちの過程に関する保育者の経験知が数値によって支持されたことも成果である。次年度は、現在の研究成果を生かし、実践と効果検証を経て、新教育課程と指導計画の確定版を作成していく予定である。

附属小学校

本校は、認知できない非認知能力それ自体を問題にするのではなく、学びの文脈内にある子供の姿に非認知能力の現れを見出し、捉えようとしてきました。また、認知能力と非認知能力は相対するものではなく、相互に働いているものと捉え、一体として高めていこうとしたことも本校の研究の特徴といえます。これらを踏まえ、非認知能力の現れとして、本校はめざす子供の姿を「ともに学び、学び抜く子供」とし、研究主題として設定しました。この主題の中の「学び抜く」を、「課題に対して自分なりに解決策を考えて取り組んだり、試行錯誤して取り組んだりしながら、やり遂げること」と定義し、このことと親和性の高い「意欲」「粘り強さ」を中心に3年間の研究に取り組んできました。その結果、児童を対象に実施した質問紙調査への回答から、「行動的エンゲージメント」及び「感情的エンゲージメント」の側面に、好意的な結果を得ることができました。また、教員を対象に実施した聞き取り調査等への回答から、非認知能力に関する研究に取り組む中で、児童の見とり方、授業観、単元観等への変容があり、その変容を教員が自覚的に、かつ好意的に捉えていることが分かりました。児童と教員の双方に大きな成果のあった本研究は、「授業とは、子どもの主体的な学びの場である」との本校の考えを、実際の授業の中で具現化し、今後も持続的に展開していくための大きなヒントとなりました。さらに、本校が長年積み重ねてきた「子供が真ん中」の教育研究の一つのモデルとなりました。

附属中学校

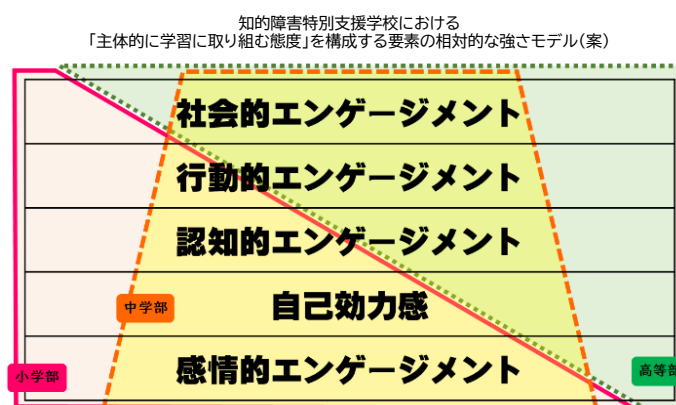
本校では、GRITに着目して研究を進めてきた。GRITを高めるための支援として、「自己調整学習を促す指導」と「モチベーションを高める指導」を行った。「自己調整学習を促す指導」とは、生徒各自の学習過程における学習方略をスキルとして伝えたり、共有したりして、身につけさせることを目指すものである。「モチベーションを高める指導」とは、生徒自身が学習の内容や方法等について選択・決定させる「自律性」を尊重した指導、できるようになったことや分かるようになったことに対して「有能さ」を実感させる指導、生徒同士や生徒と教師、生徒と教材との「関係性」を重視する指導、学んだことの「価値づけ」を行う指導である。「モチベーションを高める指導」は、「自己調整学習を促す指導」のもとに行われた学習活動を下支えするものとなる。

支援の対象は全生徒であったが、とくに各単元・各授業の目標を元とした観点別学習状況評価(ここでは「学習改善につなげる評価」を指す)が「C」の生徒を「ターゲット」として重点的に支援のための手立てを工夫した。

授業実践を通して、「ターゲット」の生徒の学習には変容が見られた。各授業において実践された支援の共通点は、生徒一人ひとりが自ら学習に向き合うことを助けるものであるという点だ。今後も研究の成果を生かして生徒たちへの支援を継続的に行いたい。

附属特別支援学校

附属特別支援学校では、学びのエンゲージメントの5つの要素を踏まえ、認知的エンゲージメントに着目し、児童生徒自らが《目標設定→方略の選択→振り返り》を繰り返すことができるよう様々な手立てを講じることで「学びに向かう力」の育成に取り組んできた。認知的エンゲージメントを中心とし、他の4要素も含めて評価していくことにより、小学部では、感情的エンゲージメント(興味関心)や自己効力感を、中学部では、それらに社会的エンゲージメント(他者との関わり)の要素が強くなり、高等部では、社会的エンゲージ(協働)をベースとしながら自己調整力を高めていくことの重要性が見えてきた。これら重要であった要素を明確にすることで、どの要素に注目し、支援していくことが有効かを示すことができると考え、『知的障害特別支援学校における「主体的に学習に取り組む態度」を構成する要素の相対的な強さモデル(案)』を作成した。モデル(案)であるため、今後の実践や、児童生徒の実態等により、相対的な強さに多少の変動はあると考えられるが、このようなモデルを授業づくりの参考とし、よりよい実践を積み重ねていきたい。



教育学部 附属学校園 共同研究WG

◎加藤克人	附属中学校 副校長
若本純子	やまなし小学校教育講座 教授
吉岡良介	附属幼稚園 研究主任
杉山雅俊	科学教育講座 准教授
石川和彦	附属小学校 研究主任
田中健史朗	やまなし小学校教育講座 准教授
進藤秀俊	附属中学校 研究主任
吉井勘人	障害児教育講座 教授
小宮山いづみ	附属特別支援学校 研究主任
○中込 司	教育実践総合センター 特任教授

◎ワーキング長 ○アドバイザー

山梨大学教育学部 附属学校 「共同研究」実践事例集

2025(令和7)年3月31日

著 作 山梨大学教育学部
教育実践・教員養成研究協議会
附属学校園共同研究ワーキング

〒400-8510 山梨県甲府市武田4-4-37

